

Tグループの発達過程に関する研究(Ⅱ)
— Bradford の学習動機と Gibb の懸念について —

津 村 俊 充

南山短期大学紀要
第11号 1983年12月 抜刷

T グループの発達過程に関する研究(Ⅱ)

—— Bradford の学習動機と Gibb の懸念について ——

津 村 俊 充

I 問 題

1940年後半に、Lewin らによって開発された T グループ(Training Group の略称)等によるラボラトリー法は、今日の複雑化する社会にあって教育・産業等の分野において人間の感受性・リーダーシップ能力の開発に貢献し、さらには真の人間関係を理解するための教育技術として発展してきている。南山短期大学人間関係科では、人間性教育の実践の一つとして T グループを実施してきている。人間関係科における T グループによる学習の位置づけは、星野・山口(1979)に記されている。

T グループとは比較的構造化されていない(やるべき仕事、役割などがあらかじめ決められていない)状況から始まり、グループメンバーの相互作用を通して自分や他者の理解・グループダイナミックスの理解などを深めながら、人間相互のより真実な交流と信頼関係の実現を試みる場であり、時系列的にながめるならグループの成長・発達過程の体験として捉えることができる。

T グループの発達過程に関して幾つかの見解がある。Bradford, L.P. (1963)は T グループにおける集団の発達過程を学習への動機づけの観点から考察し、初期には個人の自我防衛への動機づけ、中期にはグループ形成と維持への動機づけ、後期には自己成長と相互援助への動機づけが典型的に強くなる

〈付記〉本研究は、津村・山口(1981)の継続的研究として、ここに報告する。分析に際しての数値計算は南山大学電算機室(IBM 4331)を利用した。また調査の実施に協力していただいた人間関係科10期生の皆さん並びにトレーナー、教員の方々にここに深く感謝の意を表わします。

Tグループの発達過程に関する研究(Ⅱ)

ことを仮定している。

柏木(1969)はこの Bradford の経験的見解を23の T グループを対象とし、T グループへの魅力度評定の1尺度を用いて、核因子マトリックス法を適用し分析を試みている。その結果、柏木は23のうち21の T グループにおけるセッション間にこれら3つの成分の存在を見い出している。また、第3成分としての「相互学習への意欲こそが、T グループの成功、不成功のきめ手となっている」とも述べている。

篠原(1974)は、討議集団における会合雰囲気測定する尺度を作成し、その信頼性ととも Bradford の仮説を検討している。それによると、参加・防衛の因子、グループ形成の因子、相互啓発の因子の3因子を見出し、対象とした2つの T グループのうち1つに Bradford の仮説(時系列的な動機の発生)を確認している。また、柏木(1977)は、篠原(1974)より知覚・感覚的な質問紙の作成のために、形容詞、形容動詞を用いて Bradford の3つの学習動機を検出している。

一方、Gibb, J.R. (1963)は T グループの発達過程を不確定性(Uncertainty)に由来する不安の低減過程として考察している。その不確定性は、受容(acceptance)、データの流動的表出(data-flow)、目標形成(goal-formation)、社会的統制(social-control)の4領域に関する懸念(concern)としてあらわれると仮定し、これらの懸念の低減への働きかけが個人およびグループの変化と成長を実現すると述べている。

4つの懸念を簡単に述べるなら、受容懸念は自分や他者をグループのメンバーとして認めることができるかどうかに関する懸念である。グループ形成の初期に顕著であり、メンバー間に生じる「何者か」「私はこのグループにふさわしいか」といった恐怖と不信頼である。この懸念の解消は相互信頼、自他の受容を生じさせる。データの流動的表出懸念はコミュニケーションに関する懸念である。意思決定時などに顕著にあらわれる「こんなことを言ってよいか」といったコミュニケーションにおける恐怖と不信頼であり、この懸念の解消は開放的で自由なコミュニケーションを生じさせる。目標形成懸念は生産性と関連している。「グループが今やっていることがわからない」「やらされている感

T グループの発達過程に関する研究(Ⅱ)

じがする」などの個人やグループに内在する活動への動機の差異から生じる恐怖や不信頼である。この懸念の解消により、グループの仕事に主体的創造的に取り組むようになる。社会的統制懸念は「誰かにたよりたい」「思ったとおりできない」といった影響関係に関する懸念である。この懸念の解消は役割配分が自由に行なわれ相互依存関係を生じさせる。これらの4つの懸念は相互に高い相関関係にあるが、一般的には、受容懸念の解消がなされないとデータの流動的表出、目標形成、社会的統制の諸懸念の解消は不可能であると Gibb (1963) は述べている。

津村・山口(1981)は Gibb の仮説に基づき20尺度からなる懸念測定尺度を作成し、学生の T グループに実施し Gibb の仮説を検討している。その結果、4つの懸念因子を抽出し、T グループの発達とともに4つの懸念が低減することを検証している。また、発達過程には3つのタイプがあることも見い出している。さらに、懸念測定尺度の再分析において学生特有の懸念因子として2因子を抽出し、「コミットメント-形式的」の因子と「行動化-不自由」の因子として解釈を試みた。

本研究では、さらに Gibb の仮説を再検討するとともに、篠原(1974)の作成した会合雰囲気尺度も用いて Bradford の仮説の検討も行ない、大学生の T グループにおける発達過程の特徴を明らかにしようとする。すなわち、本研究は、

- ① Bradford の学習動機の測定とその推移
- ② Gibb の懸念の測定とその推移
- ③ Bradford の学習動機と Gibb の懸念の関連性
- ④ T グループへの魅力の規定因

以上4点についての検討を目的とする。

Ⅱ 方 法

1 T グループの実施内容

1982年11月15日から11月20日(5泊6日)のほぼ一週間にわたり、本学の人間関係科の授業として、T グループ合宿が実施された。参加者は1年生98名で

Tグループの発達過程に関する研究(Ⅱ)

ある。グルーピングは、入学当初(4月)に参加した合宿およびその後の授業で同一グループに所属したことがあまりなく、比較的日常一緒に行動することの少ない学生同志10名もしくは11名を1グループとし9グループ編成した。トレーナーとして学外経験者が各グループに1名つき、学内の教員9名もいずれかのグループに参加した。

Tグループの開始前には、トレーナーと教員とにより合議し作成された合宿のねらいが学生に提示された(図1参照)。

ねらい

今、ここで起っていることを通して人間関係を学ぶ。

◎グループで起こっていることと自分のあり方に気づく。

- 今、このグループの中での自分の気持、態度、行動、価値観などに気づく。
- それらが、グループの他のメンバーの気持、態度、行動、およびグループのあり方にどのような影響を与えているかに気づく。
- また自分がグループのメンバーからどのような影響を受けているのかに気づく。

-
-
-

◎互いに応答しあう

◎私とグループの成長ととりくむ

図1 合宿のねらい

合宿における日程は、参加者の状況に適したプログラム作りをするために、一日のセッション終了後トレーナーと教員とが話し合い作成された。実施されたプログラムの概要が表1に示されている。Tグループのセッションは全部で16回、その他に実習を中心にした全体会が7回行なわれた。

Tグループの発達過程に関する研究(Ⅱ)

表1 実施したプログラムの概要

	第1日	第2日	第3日	第4日	第5日	第6日
	11月15日(月)	11月16日(火)	11月17日(水)	11月18日(木)	11月19日(金)	11月20日(土)
7:30-						
8:00-		朝のつどい	朝のつどい	朝のつどい	朝のつどい	朝のつどい
9:00-		朝食	朝食	朝食	朝食	朝食
10:00-		T ₃	T ₇	T ₁₀	T ₁₄	全体会(7) 私のこれから
11:00-		休	休	休	休	
12:00-		T ₄	T ₈	T ₁₁	全体会(5) 目かくし 探	閉会
13:00-		昼食	昼食	昼食	昼食	昼食 解散
14:00-		自由	全体会(3) 無言の集 団業	自由	T ₁₅	
15:00-	開全体会(1) オリエン テーション	全体会(2) ペアインタビュー		全体会(4) グループ 動	休	
16:00-		T ₅		T ₁₆		
17:00-	T ₁		自由	T ₁₂	休	
18:00-		夕食	夕食	夕食	夕食	
19:00-		夕食	夕食	夕食	夕食	
20:00-	T ₂	T ₆	T ₉	T ₁₃	全体会(6) Tグループの ふりかえり	
21:00-	夜のつどい	夜のつどい	夜のつどい	夜のつどい	夜のつどい	
22:00-	入浴	入浴	入浴	入浴	入浴	
23:00-						
	消灯	消灯	消灯	消灯	消灯	

Tグループの発達過程に関する研究(Ⅱ)

2 調査項目

Bradfordの学習動機について 篠原(1974)が会合雰囲気測定のために作成した16項目からなる質問項目を用いた(図2)。自我防衛的側面の尺度は項目6～10, グループ形成の側面の尺度は項目1～5, 相互啓発の側面の尺度は項目11～15であり, 項目16で会合の魅力が測定される。

Gibbの懸念について 津村・山口(1981)が作成し検討した結果より, 20項目の中から4つの懸念因子において負荷量の高い項目を各懸念3項目ずつ選び, 計12項目からなる質問紙を作成した(図3)。しかし, 学習動機と同時に測定するため篠原(1974)の項目とあまりにも冗長な項目は避け, 次いで負荷量の高いものを取りあげた。受容懸念を表わす項目は1, 5, 9, データの流動的表出懸念を表わす項目は2, 6, 10, 目標形成懸念を表わす項目は3, 7, 11, 社会的統制懸念を表わす項目は4, 8, 12である。

3 調査の手続

調査は全参加者(98名)に対して1日の最終のTセッション後, すなわちT₂, T₆, T₉, T₁₃, T₁₆セッション後, 計5時点(以下それぞれD₁, D₂, D₃, D₄, D₅と略記)において行なわれた。

各参加者は図2, 図3に示された間に従い7段階尺度上で評定を行なった。

Ⅲ 結果および考察

1 Bradfordの学習動機について

動機項目の検討 各項目とも図2に示される尺度の左側の極より1～7の得点を与え, 以下の分析を行なった。

まず, あらかじめ設定されている3種の学習動機測定のための項目群の信頼性を検討するためにグループ主軸法による分析を行なった。データはD₁～D₅の全測定値を用いている。表2はグループ主軸法による結果である。

今のセッションについて

- | | | |
|--|------------|----------|
| 1. あなたは、グループメンバーに現在どの程度満足していますか。 | 全く不満足 | 非常に満足 |
| 2. 今のセッションで、メンバー間の折り合いがよかったと思いますか。 | 非常に悪い | 非常によい |
| 3. 今のセッションで、メンバーにグループとしての連帯感があったと思いますか。 | 全くなかった | 非常にあった |
| 4. 今のセッションで、1つのグループとしてのまとまりをつくらうという動きがありましたか。 | 全くなかった | 非常にあった |
| 5. 今のセッションで、個人個人が自分だけの意見を強くおしだすようなことがありましたか。 | 全くなかった | 非常にあった |
| 6. あなたは、今のセッションで発言したいと思いつながら、発言できないことがありましたか。 | 全くなかった | 非常にあった |
| 7. あなたは、今のセッションが早く終わればよいのにと感じたことがありましたか。 | 全くなかった | 非常にあった |
| 8. あなたは、今のセッションの場から脱けだしてしまいたいと感じたことがありましたか。 | 全くなかった | 非常にあった |
| 9. あなたは、今のセッションでグループのメンバーやトレーナーが気になりましたか。 | 全く気にならなかった | 非常に気になった |
| 10. あなたは、今のセッションで何か不安を感じたことがありましたか。 | 全くなかった | 非常にあった |
| 11. あなたは、今のセッションで他人の言うことを(ニュアンスも含めて)よく理解できたと思いますか。 | 全くできなかった | 非常にできた |
| 12. あなたは、今のセッションでメンバーから「得るものがあった」という実感がありますか。 | 全くなかった | 非常にあった |
| 13. 今のセッションで、メンバー間に相互に啓発しあおうとする動きがありましたか。 | 全くなかった | 非常にあった |
| 14. 今のセッションで、お互いから何か学びあうという雰囲気グループにありましたか。 | 全くなかった | 非常にあった |
| 15. あなたは、今のセッションにどのくらい参加できたと思いますか。 | 全くできなかった | 非常に出来た |
| 16. あなたは、今のセッションに現在どのくらい魅力を感じていますか。 | 全く感じない | 非常に感じる |

図2 会合雰囲気測定のための項目

あなたは、今のセッションでどのようでしたか。

- | | | |
|------------------------------|--------------------------|------------------------------|
| 1. みせかけをよそおっているようなよそよそしさはない | <input type="checkbox"/> | 儀礼的な発言や行動が多くなってしまう |
| 2. 特定の人としか話していない | <input type="checkbox"/> | メンバーの誰とでも話せている |
| 3. グループがいま取組んでいることに関心がある | <input type="checkbox"/> | グループがいま取組んでいることに関心がない |
| 4. 誰かに頼っていたい気持のみが強い | <input type="checkbox"/> | お互いに頼り、頼られていると感じている |
| 5. やればよいと思ったこともできないことが多い | <input type="checkbox"/> | やればよいと思ったことはほとんどできる |
| 6. 自分の意見や感情をかくして言わないことがある | <input type="checkbox"/> | 自分の意見や感情をかくさずに言うことが多い |
| 7. 自分達でしている感じが強い | <input type="checkbox"/> | 誰かにさせられている感じが強い |
| 8. 規則・形式にこだわらないで行動できる | <input type="checkbox"/> | 規則・形式にこだわってしまっていることが多い |
| 9. 自分の感情や行動が無視されることが多い | <input type="checkbox"/> | 自分の感情や行動が大切にされている |
| 10. 何か言うとき、ぼかさないではっきり言うことが多い | <input type="checkbox"/> | 何か言うとき、あいまいにぼかして言うことが多い |
| 11. 活動中グループが何をしているのかよくわかっている | <input type="checkbox"/> | 活動中グループが何をしているのかわからなくなることが多い |
| 12. おたがいに影響しあっている実感がある | <input type="checkbox"/> | 特定の人の影響のみが強いと感じている |

図3 懸念測定のための項目

T グループの発達過程に関する研究(Ⅱ)

表2 グループ主軸法による合成変量の構造 (学習動機)

項 目 の 主 旨	合成変量の構造		
	I	Ⅱ	Ⅲ
1 メンバーの満足度	-.488	.858	.625
2 メンバー間のおりあい	-.544	.895	.630
3 グループとしての連帯感	-.485	.908	.690
4 グループとしてのまとまりを作る動き	-.380	.790	.639
5 自分だけの意見をおしだす*	.297	-.360	-.180
6 発言したいと思いつながら発言できない	.607	-.357	-.345
7 会合が早く終わればよいのにと感じる	.783	-.476	-.490
8 会合の場から脱げだしたい	.810	-.456	-.434
9 メンバーやトレーナーが気になる	.589	-.269	-.209
10 会合で不安を感じる	.763	-.430	-.385
11 会合で他人の言うことが理解できた	-.459	.502	.706
12 メンバーから得るものがあった	-.378	.598	.858
13 メンバー間に相互に啓発する動きがあった	-.339	.583	.786
14 お互いから学びあう雰囲気があった	-.407	.665	.849
15 今の会合に参加できた	-.545	.583	.778
Eigen Value	2.568	3.115	3.179
Alpha Coefficient	.763	.849	.857

注1) *印は逆尺度

注2) ゴチック体の数値は、.500以上の負荷量を示す。

注3) 項目の主旨には、篠原(1974)の表現を用いている。

表2におけるアルファ係数を見ると、第Ⅰ、第Ⅱ、第Ⅲ合成変量に対してそれぞれ.763、.849、.857と高い値を示している。篠原(1974)の結果ではそれぞれ.805、.832、.810となっており、それらと比較すると第Ⅰ合成変量ではやや低い、他の2つの合成変量ではより高い値を示している。このことより、本調査での各項目群の測定信頼性も高いと言えるだろう。

次に、各合成変量における因子負荷量について検討する。便宜上.500以上の負荷量をゴチックで示し(表2)、それを規準にし3つの合成変量と各項目との関連についてみることにする。

第Ⅰ合成変量は、自我防衛の因子として指定した項目群であるので項目6～10はいずれも規準に達し、.589～.810と高い負荷量を示している。指定した項目以外では、項目2(-.544)と項目15(-.545)とに高い負荷量が見られる。こ

T グループの発達過程に関する研究(Ⅱ)

のことは、防衛的動機の高まりはグループメンバー間の折りあいの悪さ(項目2)とTグループへの参加の度合の低さ(項目15)を含むことを表わしている。

第Ⅱの合成変量は、グループ形成因子として指定した項目群である。項目1～4に関しては、.790～.908と非常に高い負荷量を示しているが、項目5では-.360と低い負荷量である。

負の値をとっているのは逆向きの尺度のためであるが、篠原(1974)の結果では、.666の値が得られている。このことは、項目5がグループが一つにまとまろうとする動きにそれ程密接な関連を持っていないことであり、大学生特有の傾向かもしれない。一般に「学生の自己主張が少ない」といわれる今日にあって、逆に個人々が意見を強く主張できるようになっていくことがグループ形成に貢献することにもつながっていくのかもしれない。このことは大学生のTグループの発達過程の一側面として興味深い。指定以外に、項目11～15の相互啓発因子としての項目群にも.502～.665と高い負荷量を示している。これより、グループの連帯感・まとまりをつくろうという動きがグループメンバー間の相互啓発的学習へ向う動きと密接に関連していることがわかる。

第Ⅲ合成量は、相互啓発因子として指定した項目群であるので項目11～15は.706～.858と高い負荷量を示している。指定以外で高い負荷量をとる項目は、前述したようにグループ形成を表わす項目1～4である。

以上、各合成変量と項目との関連について述べてきたが、グループ形成因子における項目5の結果を除いて篠原(1974)と同様の結果が得られた。

表3は合成変量間の相関係数を示しており、3つの合成変量間には高い相関が見られる。とりわけ、第Ⅱ合成変量(グループ形成の因子)と第Ⅲ合成変量(相互啓発の因子)との相関は.737とかなり高い値である。このことは篠原(1974)の結果と同じであり、両因子はかなり共通した変動があることがわかる。第Ⅰ

表3 3つの合成変量間の相関係数(学習動機)

合成変量	I	II	III
I (自我防衛の因子)	1.000		
II (グループ形成の因子)	-.563	1.000	
III (相互啓発の因子)	-.530	.737	1.000

T グループの発達過程に関する研究(II)

合成変量(自我防衛の因子)も第II合成変量(グループ形成の因子)と-.563, 第III合成変量(相互啓発の因子)と-.530と比較的高い相関がある。このことは自我防衛の動機の減少がグループがまとまろうとすることと、また集団のメンバー間の相互啓発と関連していることを示している。ただ、それ以上にグループがまとまろうとする動機の高まりと集団メンバー間の相互啓発への動きとは深い関連をもっていると考えられる。

学習動機の推移 前項で検討した各学習動機を表わす5項目の単純合成得点を用いて、時点ごと、学習動機ごとに平均と標準偏差を算出したのが表4である。図4は、各平均値を時点ごとに図示したものである。なお、項目5は合成得点算出の際、左側の極より7~1と逆転させている。すなわち、各合成得点とも得点が高くなる程、各学習動機の高まりを示すことになる。

表4 3種の学習動機の時点ごとの平均と標準偏差

動機		時 点					TOTAL
		D ₁	D ₂	D ₃	D ₄	D ₅	
自我防衛の動機	MEAN	19.27	19.97 ^{**}	17.62	17.28 ^{***}	11.45	17.12
	S.D.	6.19	7.07	5.84	7.08	5.95	7.09
グループ形成の動機	MEAN	23.47	23.53	23.96 ^{***}	26.37 ^{***}	31.78	25.82
	S.D.	4.44	5.02	5.66	5.60	3.42	5.82
相互啓発の動機	MEAN	24.07	23.56	22.21 ^{***}	25.25 ^{***}	30.51	25.12
	S.D.	4.90	5.97	6.25	6.54	4.23	6.31

***印は $p < .01$ **印は $p < .05$ (D₁~D₅:N=98, TOTAL :N=490)

表4、図4によると、全体的には、時間的経過とともに自我防衛の動機は減少し、グループ形成の動機と相互啓発の動機は強くなっている。

自我防衛の動機はD₁ ~ D₂ ではやや強まり、D₂ ~ D₃ ではかなり減少しており、その差は5%水準で有意である。そしてD₃ ~ D₄ ではあまり減少傾向は見られず、D₄ ~ D₅ において大きく減少している ($p < .01$)。

グループ形成への動機づけはD₁ ~ D₂ ではほとんど変化は見られず、D₂ ~ D₃ でやや増加し、D₃ ~ D₄、D₄ ~ D₅ において急激に増加している ($p < .01$)。

相互啓発の動機はD₁ からD₂ にかけてやや減少し、D₂ ~ D₃ にかけてさら

T グループの発達過程に関する研究(Ⅱ)

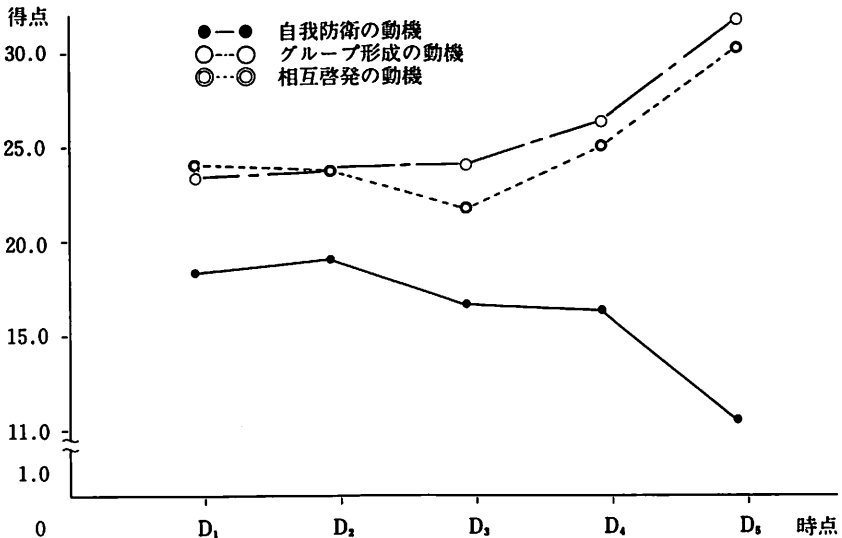


図4 3つの学習動機の平均合成得点の変化

に15%水準で有意に減少している。D₃～D₄で初めて増加し(p<.01), D₄～D₅でもかなりの増加が見られる(p<.01)。

以上の3つの動機の変化を併わせて記述すると、D₁からD₂にかけてはわずかに自我防衛の動機の増加が見られ、グループ形成の動機は変化せず、相互啓発の動機は逆に減少している。D₂からD₃においては、自我防衛の動機が大きく減少し、グループ形成の動機は若干の増加だけにとどまり、相互啓発の動機はさらに減少傾向を示している。そしてD₃からD₄においては自我防衛の動機は変化なく、グループ形成の動機と相互啓発の動機がともに高くなっている。D₄からD₅にかけては自我防衛の動機の急激な減少、グループ形成、相互啓発の動機の急激な増加がみられる。

以上のことより、Bradford (1963)の提唱するように、初期から中期にかけては自我防衛に向けてエネルギーを分散させ、その安定とともにグループ形成への動機づけや相互啓発への動機づけが高まっていく様子が理解される。すなわち、防衛的動機づけが少なくなると、メンバー相互に様々な感情を表現し受容することができるようになり、グループやグループメンバーに対する信頼感

I グループの発達過程に関する研究(Ⅱ)

が生まれ、学習集団としてメンバー各自が成長し他者を援助しようとする試みがなされるようになる。

さらに、グループ形成への動機づけと相互啓発への動機づけの推移の違いとして、グループ形成への動機づけは初期から中期にかけては比較的安定しているのに対して相互啓発への動機づけは一時減少することが認められる。このことは Bradford (1963)が海辺の波にたとえているように学習における動機の推移を各動機に向けるエネルギーの量の波として考えることも可能であろう。すなわち、自我防衛へのエネルギーの波が打ち寄せると相互啓発へのエネルギーが引き、自我防衛へのエネルギーが引くとグループ形成、相互啓発へのエネルギーの波が打ち寄せてくると解釈できる。しかし、この見解はさらに多くのセッションを調査時点にとり、詳細に検討する必要がある。

2 Gibb の懸念について

懸念項目の検討 受容、データの流動的表出、目標形成、社会的統制の4つの懸念として、前回の研究(1981)より選択した3個ずつの項目群の信頼性を検討するために、グループ主軸法により分析を試みる。各項目とも図3に示される尺度の左側の極より1～7の得点を与え、以下の分析を行なった。表5はD₁～D₅までの全測定値を用いてグループ主軸法により算出した結果である。

表5の結果によると、アルファ係数は第Ⅰ、第Ⅱ、第Ⅲ、第Ⅳ合成変量についてそれぞれ.727、.641、.727、.718と高い値を示している。これは Bradford の学習動機の測定項目の検討におけるアルファ係数よりもやや低いが、因子ごとの項目測定の信頼性は高いと言えるだろう。

次に、便宜的に.650以上の因子負荷量を基準として4つの合成変量と各項目との関連について検討する。

第Ⅰ合成変量は受容懸念因子として指定したので、項目1「儀礼的な発言や行動が多くなってしまおう」に-.797、項目5「やればよいと思ったことはどんどんできる」に.818、項目9「自分の感情や行動が大切にされていると感じた」に.798と非常に高い負荷量が得られている。この合成変量は受容懸念の

T グループの発達過程に関する研究(Ⅱ)

表5 グループ主軸法による合成変量の構造 (懸念)

項 目	合 成 変 量 の 構 造			
	I	II	III	IV
1. 儀礼的な発言や行動が多くなってしまう	-.797	-.571	.558	.588
5. やればよいと思ったことはどんどんできる*	.818	.681	-.442	-.588
9. 自分の感情や行動が大切にされていると感じた*	.798	.580	-.580	-.548
2. メンバーの誰とでも話せている*	.490	.654	-.418	-.508
6. 自分の意見や感情をかくさずに言うことが多い*	.718	.846	-.440	-.570
10. 何か言うとき、あいまいにぼかしていることが多い	-.515	-.777	.401	.518
3. グループがいま取組んでいることに関心がない	-.508	-.388	.801	.482
7. 誰かにさせられている感じが強い	-.527	-.483	.783	.609
11. 活動中グループが何をしているのかわからなくなる ことが多い	-.493	-.453	.829	.606
4. お互いに頼り、頼られていると感じている*	.597	.569	-.475	-.782
8. 規則・形式にこだわってしまっていることが多い	-.624	-.618	.595	.831
12. 特定の人の影響のみが強いと感じている	-.491	-.482	.616	.785
Eigen Value	1.941	1.747	1.941	1.919
Alpha Coefficient	.727	.641	.727	.718

注1) *印は逆尺度

注2) ゴチック体の数値は.650以上の負荷量を示す。

解消の因子として解釈される。指定した項目以外に負荷量が高いのは項目6の.718であり、このことは受容懸念の解消とともに「自分の意見や感情をかくさずに言うことが多い」状況が生じていると考えられる。

第Ⅱ合成変量はデータの流動的表出懸念因子として指定しているので、項目2「メンバーの誰とでも話せている」に.654、項目6「自分の意見や感情をかくさずに言うことが多い」に.846、項目10「何か言うとき、あいまいにぼかしていることが多い」に-.777と高い負荷量を示している。この合成変量はデータの流動的表出懸念の解消を意味している。指定した以外に項目5に.681と高い負荷量を示している。このことはデータの流動的表出懸念の解消が「やればよいと思ったことはどんどんできる」といった状況を含んでいると考えられる。

第Ⅲ合成量は目標形成懸念因子として指定しているので項目3「グループがいま取組んでいることに関心がない」に.801、項目7「誰かにさせられている感じが強い」に.783、項目11「活動中グループが何をしているのかわからなくなるが多い」に.829と非常に高い負荷量を示している。他には.650以上の

I グループの発達過程に関する研究(II)

規準では高い負荷量をもつ項目は見られない。

第IV合成変量は社会的統制懸念因子として指定した項目4「お互いに頼り、頼られていると感じている」に-.782, 項目8「規則・形式にこだわってしまっていることが多い」に.831, 項目12「特定の人の影響のみが強いと感じている」に.785と高い負荷量を示している。

第III合成変量と第IV合成変量はそれぞれの懸念の高まりを意味する因子として解釈される。

以上、各合成変量と各項目との関連について検討してきたが、前回の研究(1981)とほぼ同様の結果が得られている。

次に、4つの合成変量間の関連についてみてみよう。表6に合成変量間の相関係数が示されており、それによると全体に合成変量間の関連はかなり高いと言えるだろう。

表6 4つの合成変量間の相関係数

合 成 変 量	I	II	III	IV
I (受容懸念因子)	1.000			
II (データの流動的表出懸念因子)	.760	1.000		
III (目標形成懸念因子)	-.633	-.548	1.000	
VI (社会的統制懸念因子)	-.715	-.697	.703	1.000

第I合成変量(受容懸念因子)は第II合成変量(データの流動的表出懸念因子)と.760と相関係数が一番高く、さらに第IV合成変量(社会的統制懸念因子)と-.715, 第III合成変量(目標形成懸念因子)と-.633と高い値を示している。なお、相関係数が負の値をとるのは、懸念の高まりと解消といった方向性の違いからである。第IV合成変量(社会的統制懸念因子)は第II合成変量(データの流動的表出懸念因子)と第III合成変量(目標形成懸念因子)とにそれぞれ-.697, .703と高い相関を示している。ただデータの流動的表出懸念因子と目標形成懸念因子とは-.548と相対的に低い値を示している。これらの結果は前回の研究(1981)とほぼ一致しており、4つの合成変量はかなりの割合で共変動し、それらの関係は安定していると言えるだろう。

以上のことより、受容懸念因子は他の3つの因子と相互に影響し合い、社会

Tグループの発達過程に関する研究(II)

的統制懸念因子は他の2つの因子とともに変動している。このことはGibb (1963)が述べるように、4つの懸念は相互に高い関連があること、そして受容懸念の低減が他の3つの懸念の低減と強い関連があることを示している。懸念解消過程へのヒエラルキーの見解については、後の項で検討を行なう。

懸念の推移 懸念の時系列的変化をみるために、前述の各因子3項目の単純合成得点を算出し、時点ごとに平均と標準偏差を求めたのが表7である。図5は、4つの懸念の合成得点の平均値を時点ごとに図示したものである。なお、項目2, 4, 5, 6, 9は逆転して合成得点を算出しているの、合成得点の減少が懸念の低減を表わすことになる。

表7 4つの懸念の合成得点の時ごとの平均と標準偏差

懸念	時点	D ₁	D ₂	D ₃	D ₄	D ₅	TOTAL
	受容懸念	MEAN	10.98	10.83	10.49	9.88	6.34
S.D.		2.97	3.48	3.22	3.77	3.15	3.74
データの流動的表出懸念	MEAN	11.98	12.36	11.61	10.76	7.56	10.85
	S.D.	3.63	3.37	3.53	3.59	3.64	3.94
目標形成懸念	MEAN	9.20	10.18	9.60	7.72	5.30	8.40
	S.D.	3.51	4.53	4.09	3.61	2.65	4.11
社会的統制懸念	MEAN	11.85	11.75	10.92	9.71	6.36	10.12
	S.D.	3.02	3.59	3.34	3.83	3.29	3.97

***印はp<.01 **印はp<.05 *印はp<.10
(D₁~D₅:N=98, TOTAL:N=490)

表7, 図5によると、目標形成懸念は時点を通して他の3つの懸念よりも低い。この目標形成懸念の低さは、Tグループ合宿が授業の一環として行なわれ、学内における合宿準備に際した合宿開始時にも合宿のねらいが強調されていることの反映として解釈できる。一方、データの流動的表出懸念が一番高く、次いで社会的統制懸念が高くなっている。この両懸念の高さは学生相互のコミュニケーションの難しさと他者に影響されやすく、他者に依存的である学生の特徴を表わしていると解釈できるかもしれない。

各懸念の時系列的特徴を見ていくと、受容懸念はD₁, D₂, D₃, D₄とゆるやかに減少し、D₄からD₅にかけて大きく低減している。データの流動的

Tグループの発達過程に関する研究(Ⅱ)

表出懸念は $D_1 \sim D_2$ において少し高くなり、 $D_2 \sim D_3$ ($p < .15$), $D_3 \sim D_4$ ($p < .10$)ではゆるやかな減少傾向を示し、 $D_4 \sim D_5$ ($p < .01$)と急激に低減している。目標形成懸念は $D_1 \sim D_2$ において高まり($p < .10$), $D_2 \sim D_3$ でわずかに減少を示し、 $D_3 \sim D_4$, $D_4 \sim D_5$ (ともに、 $p < .01$)と急激に低減している。社会的統制懸念は $D_1 \sim D_2$ でわずかな減少だが、 $D_2 \sim D_3$ ($p < .10$), $D_3 \sim D_4$ ($p < .05$), $D_4 \sim D_5$ ($p < .01$)と加速度的に減少している。

目標形成懸念とデータの流動的表出懸念の第1日から第2日にかけての増加傾向は、前回の研究(1981)における解釈を裏づけるものとなっている。Tグループ合宿は人間関係科の必修科目として参加することを義務づけられている。合宿のねらい(図1)は学生に提示されるので全体としては目標形成懸念は

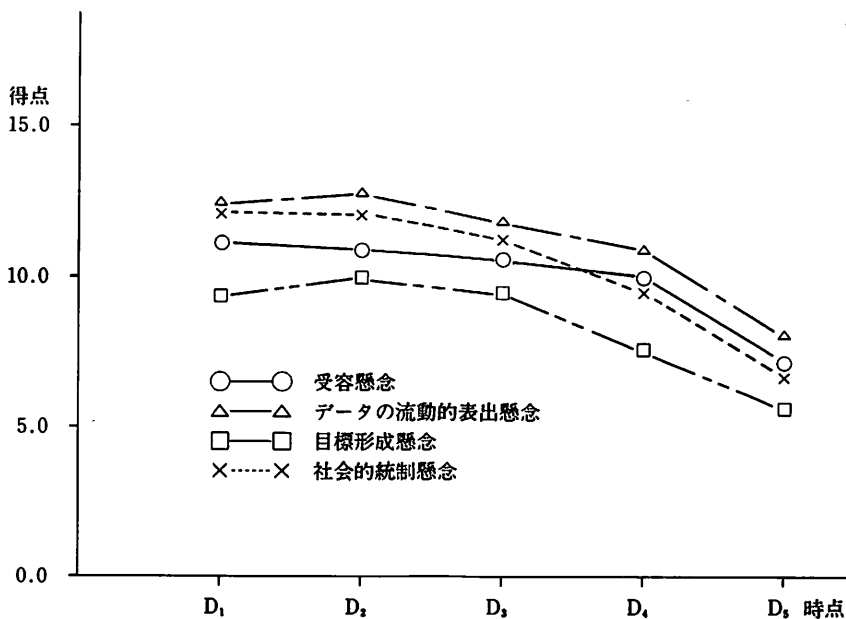


図5 4つの懸念の平均合成得点の変化

Tグループの発達過程に関する研究(Ⅱ)

相対的に低いと解釈したが、Tセッションが第1日、第2日と進むと「我々は一体何をやっているのか」といった問題に直面し、目標形成懸念は高まることになるのだろう。そして、第2日目以降からは、自分なりの目標を見出しながら、Tグループセッションに取りくむようになる。データの流動的表出懸念の $D_1 \sim D_2$ の増加傾向は、学生相互は何らかの形で顔見知りであるが、従来の学習場面と異なるあいまいな事態に対する不安から、また未知な存在としてのトレーナーに対する不安から「何を言えばいいのか、こんなことを言ってもいいのか」といった懸念の高まりとして解釈できる。このことは初期の沈黙の長さとも多に関連があるだろう。一方、初期における受容懸念と社会的統制懸念の変化は少ない。そして第3日、第4日と経過すると受容懸念を除いて他の3つの懸念が低減し、第5日目には4つの懸念とも大きく低減する。

懸念の推移は全体的には4つの懸念とも時間の経過とともに低減している。相関的分析では各懸念の推移を因果関係で捉えることは難しいが、以上の結果をあえて因果関係としてまとめると次のように述べることができる。Gibbの仮定するヒエラルキー的の見解(受容懸念の低減→データの流動的表出懸念の低減→目標形成懸念の低減→社会的統制懸念の低減)とは逆に、まず「特定の人から影響をうけず、相互に影響し合っている」といった社会的統制懸念の解消がグループの取りくむ目標を明確にし(目標懸念の解消)、メンバー相互のコミュニケーションも自由に行なわれ(データの流動的表出懸念の解消)、それらの懸念の低減とともに受容懸念が解消され相互信頼が生まれると考えられる。このことは学生のTグループの特徴として考えられるが、さらに詳細な検討が必要である。

3 学習動機と懸念の関連性について

表8-1、8-2、8-3、は各合成得点を用いて各学習動機と4つの懸念との相関係数を時点ごとに算出したものである。

表8-1のTOTAL欄をみると、自我防衛の動機は受容懸念と.628である。また、 D_4 、 D_5 で.651、.619と高い値である。このことは、自我防衛のために用いるエネルギーが減少することとグループのメンバーとして自他ともに受

I グループの発達過程に関する研究(Ⅱ)

表 8-1 自我防衛の動機と各懸念との時点ごとの相関係数

懸念 \ 時点	D ₁	D ₂	D ₃	D ₄	D ₅	TOTAL
受 容 懸 念	.437	.498	.474	.651	.619	.628
データの流動的表出懸念	.395	.462	.494	.586	.568	.591
目 標 形 成 懸 念	.454	.455	.484	.519	.535	.564
社会的統制懸念	.422	.471	.414	.509	.543	.583

注) ゴチック体の数値は .600以上の相関係数を示す

表 8-2 グループ形成の動機と各懸念との時点ごとの相関係数

懸念 \ 時点	D ₁	D ₂	D ₃	D ₄	D ₅	TOTAL
受 容 懸 念	-.402	-.349	-.439	-.585	-.525	-.590
データの流動的表出懸念	-.339	-.257	-.387	-.597	-.529	-.551
目 標 形 成 懸 念	-.297	-.536	-.543	-.797	-.593	-.649
社会的統制懸念	-.412	-.396	-.448	-.673	-.577	-.638

注) ゴチック体の数値は .600以上の相関係数を示す

表 8-3 相互啓発の動機と各懸念との時点ごとの相関係数

懸念 \ 時点	D ₁	D ₂	D ₃	D ₄	D ₅	TOTAL
受 容 懸 念	-.508	-.535	-.564	-.704	-.605	-.664
データの流動的表出懸念	-.480	-.446	-.522	-.646	-.629	-.619
目 標 形 成 懸 念	-.490	-.750	-.751	-.776	-.594	-.743
社会的統制懸念	-.526	-.579	-.505	-.681	-.632	-.664

注) ゴチック体の数値は .600以上の相関係数を示す

容されるようになる受容懸念の解消とは深い関係にあることを示している。この関係は第4日目、第5日目においてより明確になる。

表 8-2 によるとグループ形成の動機は目標形成懸念と社会的統制懸念とに TOTAL でそれぞれ -.649, -.638と高い相関がある。これより、グループのメンバーが一つにまとまろうとするエネルギーの増加は「グループが今やっていることがなにか」が明確になっていく過程(目標形成懸念の解消)と「メンバーが相互に頼り頼られている感じもてる」ようになる過程(社会的統制懸念の解消)と深い関係にあることがわかる。

T グループの発達過程に関する研究(Ⅱ)

相互啓発の動機は、表 8-3 の TOTAL 欄をみると、受容懸念、データの流動的表出懸念、目標形成懸念と社会的統制懸念とそれぞれ -0.664 , -0.619 , -0.743 , -0.664 と高い相関係数が得られている。Bradford (1963) によると相互啓発の動機はグループの発達過程の後期に強くあらわれると仮定しており、一方の Gibb (1963) のによるグループの成長が 4 つの懸念の解消により実現されるとする仮定と併せて考えるなら、このことは理解できる。すなわち、4 つの懸念が解消して相互信頼の風土ができていながら、相互に学び啓発し合おうとするエネルギーも増大するのであろう。とりわけ、目標形成懸念とは D_2 といった初期の時点から高い相関が得られており、相互啓発の動機はまさにグループが今何をやろうとしているのが明確になり、主体的に取りくむようになること(目標形成懸念の解消)と強い関連をもっている。

4 魅力の規定因について

図 2 の項目 16 において T グループセッションの魅力の測定している。表 9 は時点ごとに魅力の評定値の平均と標準偏差を求めたものである。魅力の平均値は $D_1 \sim D_2$ と若干の減少を示し、 $D_2 \sim D_3$, $D_3 \sim D_4$, $D_4 \sim D_5$ と経過する程有意に増加している。

表 9 魅力の時点ごとの平均と標準偏差

	D_1	D_2	D_3	D_4	D_5	TOTAL
MEAN	4.68	4.58*	5.02**	5.54***	6.59	5.28
S.D.	1.47	1.63	1.57	1.63	0.77	1.62

***印は $p < .01$ **印は $p < .05$ *印は $p < .10$ で有意
($D_1 \sim D_5: N=98$, TOTAL: $N=490$)

魅力が何によって規定されるのかを検討するために、魅力を従属変数に、Bradford の 3 つの動機と Gibb の 4 つの懸念を独立変数として重回帰分析^{注)}を行なった。データとして魅力は評定値、動機と懸念は合成得点を用いている。

注) 重回帰分析は S.P.S.S. (IBM 版) により、変数追加モードを用いて算出した。なお、表 10-2 の D_5 および TOTAL の空欄(-)の部分は変数追加による説明率の増加がきわめて少ないため出力されなかった。

I グループの発達過程に関する研究(II)

表10-1 重回帰分析の結果

時点	動機・懸念	重相関係数	決定係数	標準化偏 回帰係数	相関係数
D ₁	社会的統制懸念	.525	.276	-.293	-.525
	相互啓発の動機	.599	.359	.305	.521
	目標形成懸念	.616	.379	-.143	-.476
	データの流動的表出懸念	.621	.385	.140	-.293
	自我防衛の動機	.626	.392	-.096	-.368
	受容懸念	.627	.394	-.073	-.405
	グループ形成の動機	.628	.395	-.039	.262
D ₂	目標形成懸念	.779	.607	-.425	-.779
	相互啓発の動機	.817	.668	.307	.748
	自我防衛の動機	.827	.683	-.101	-.472
	グループ形成の動機	.830	.689	.105	.598
	受容懸念	.832	.692	-.104	-.543
	データの流動的表出懸念	.833	.694	.060	-.367
	社会的統制懸念	.833	.694	.022	-.536
D ₃	相互啓発の動機	.744	.553	.463	.744
	目標形成懸念	.791	.626	-.328	-.737
	受容懸念	.799	.638	.258	-.360
	社会的統制懸念	.810	.655	-.150	-.532
	自我防衛の動機	.815	.665	-.100	-.460
	データの流動的表出懸念	.817	.667	-.065	-.428
	グループ形成の動機	.817	.668	.039	.533

その結果は表10-1, 10-2 に示されている。

表10-1, 10-2 によると, D₁ ~ D₅ の時点を通して特に Bradford の3つの動機のうち相互啓発の動機がそれぞれ標準化偏回帰係数(以下回帰係数). 305, .307, .463, .484, .412と高く, 魅力の規定因としてウェイトは大きい。すなわち, グループのメンバー相互に啓発し学び合おうとする努力とそれを実現することは, グループに対して大いに魅力を感じさせることになると考えられる。このことは柏木(1969)が核因子マトリックス法により見出した結果, 及び篠原(1974)のグループ主軸法による因子負荷量からの知見と一致するものである。

一方, Gibb の懸念についてみると, D₁ においては社会的統制懸念に, D₂

Tグループの発達過程に関する研究(Ⅱ)

表10-2 重回帰分析の結果

時点	動機・懸念	重相関係数	決定係数	標準化偏 回帰係数	相関係数
D ₄	相互啓発の動機	.793	.628	.484	.793
	目標形成懸念	.826	.683	-.432	-.763
	社会的統制懸念	.837	.701	.245	-.533
	グループ形成の動機	.840	.706	.127	.729
	データの流動的表出懸念	.842	.710	-.103	-.569
	自我防衛の動機	.844	.714	.088	-.424
	受容懸念	.845	.714	-.030	-.581
D ₅	相互啓発の動機	.668	.447	.412	.668
	受容懸念	.709	.503	-.248	-.592
	目標形成懸念	.719	.517	-.102	-.556
	社会的統制懸念	.723	.523	-.146	-.601
	データの流動的表出懸念	.727	.529	.137	-.513
	グループ形成の動機	.729	.531	.069	.516
	自我防衛の動機	—	—	—	-.398
TOTAL	相互啓発の動機	.749	.561	.357	.749
	目標形成の懸念	.798	.637	-.330	-.741
	グループ形成の動機	.804	.647	.111	.650
	自我防衛の懸念	.806	.650	-.064	-.528
	社会的統制懸念	.807	.651	-.073	-.635
	データの流動的表出懸念	.807	.651	.024	-.529
	受容懸念	—	—	—	-.585

では目標形成懸念にそれぞれ回帰係数-.293, -.425という高い値が得られている。表9によると、D₁、D₂における魅力の平均評定値が相対的に低く、またわずかな低下を示していることから次のように解釈できる。第1日目は特に「誰かに頼りたくなったり、特定の人物からの影響を強く受けている」といった社会的統制懸念が魅力を低減させ、第2日目では特に「グループの今やっていることがわからなくなったり、誰かにやらされている」といった目標形成懸念の高まり(表7)が魅力を低くさせると考えられる。

D₃とD₄ともに目標形成懸念に対する回帰係数の値は相互啓発の動機に次いで-.328と-.432と高い。表9より魅力はD₃、D₄と増加しており、一方表7より目標形成懸念は減少している。これより、「グループが今やっている

Tグループの発達過程に関する研究(Ⅱ)

ことを理解し、それに関心を持ち、自分達でやっている実感をもつ」といった目標形成懸念の解消がこの時期に特に魅力の増加に影響を与えていると考えられる。

D₅では、やはり相互啓発の動機に対する回帰係数が一番高く、次いで受容懸念に-.248と高い値を示している。第5日目には「グループのメンバーとして自他ともに受け入れられ、相互信頼が生まれる」といった受容懸念の解消が魅力の増加を強く規定すると考えられる。

以上のように Gibb の懸念と魅力との関連についてみてくると、その結果は、懸念の推移の項で述べたヒエラルキー的見解の根拠の一つとして考えられる。すなわち、4つの懸念とも全体的には時間経過とともに低減していくが、魅力と懸念との関連においては社会的統制懸念→目標形成懸念→データの流動的表出懸念→受容懸念といった順序で懸念が生じ低減していく過程の存在が認められる。

最後に、時点を通じたデータでは、表10-2のTOTALの欄を見ると、相互啓発の動機と目標形成懸念に回帰係数がそれぞれ.357、-.330と高いウェイトを示している。両変数による決定係数が.637という高い値を示し、他の変数の追加によっても決定係数はあまり増加していないことより、大きくはこの2変数が魅力を規定すると言えるだろう。すなわち、学生にとって魅力を強く感じるのは、グループメンバー相互に学び援助し合うエネルギーが高まり、自らの取りくむ目標が明確になり、主体的にグループに参加している実感をもつ時である。

IV 要 約

本研究の目的は、Bradfordの学習動機の測定とその推移、Gibbの懸念の測定とその推移、学習動機と懸念の関連性及び魅力の規定因の4点を検討することであった。

その結果は次のようにまとめることができる。

1 Bradfordの学習動機については、使用した尺度のうち項目5「個人個人

Tグループの発達過程に関する研究(Ⅱ)

が自分だけの意見を強くおしだす」を除いて、篠原(1974)の結果と同様に3つの動機が高い信頼性で測定されることが見出された。なお、項目5は学生の特徴として解釈された。3つの動機は、自我防衛の動機→グループ形成の動機→相互啓発の動機に至るとする Bradford の発達過程の仮説を支持する結果が得られた。

2 Gibb の懸念については、前回の研究(1981)と同様に、4つの懸念の測定は高い信頼性をもつことが明らかにされた。懸念の推移は、Gibb の発達過程の仮説とは異なり、社会的統制懸念→目標形成懸念→データの流動的表出懸念→受容懸念の順で低減していくと考察した。

3 自我防衛の動機は受容懸念と、グループ形成の動機は目標形成懸念および社会的統制懸念と、相互啓発の動機は4つの懸念すべてと深い関連のあることが見出された。

4 魅力の規定因としては、重回帰分析によって検討した結果、相互啓発の動機にウェイトが大きく、次いで目標形成懸念と関連していることが明らかになった。

(引用文献)

- Bradford, L.P., メンバーシップと学習過程, In Bradford, L.P.et.al. T - Group Theory and Laboratory Method, 1964, John Wiley & Sons, Inc. (邦訳)三隅二不二監訳, 感受性訓練, 第7章, 1971, 日本生産性本部
- Gibb, J.R.; 信頼関係形成のための風土, In Bradford, L.P.et.al. T - Group Theory and Laboratory Method, 1964, John Wiley & Sons, Inc. (邦訳)三隅二不二監訳, 感受性訓練, 第10章, 1971, 日本生産性本部
- 星野欣生, 山口真人, 大学教育への T グループ適用の試み-教育の変革を求めて-, 南山短期大学紀要, 1979, 7, 59-99.
- 柏木繁男, 核因子マトリックスによる T グループの学習動機の変動の解析, 心理学研究, 1969, 40, 1-11.
- 柏木繁男, グループ学習における動機の時系列変動経過のための診断項目群の作成について, 心理学研究, 1977, 47, 316-324.
- 篠原弘章, 討議集団における会合雰囲気測定(I), 熊本大学教育学部紀要, 1974, 23, 183-193.
- 津村俊充, 山口真人, T グループの発達過程に関する研究, 南山短期大学紀要, 1981, 9, 81-102.